

回顧 私と日本社会党

——伊藤茂氏に聞く（上）



社会党とのかかわりの契機

——この研究会も、これで7回目になります。社会党も総評も歴史になったと。実際に活動を担われてきた方々に、いろいろお話を聞いて記録を残していこうということで、これまですでに4人の方からお話を伺いました。

加藤宣幸さん、初岡昌一郎さん、飛鳥田横浜市長と一緒に船橋成幸さん、前は曾我祐次さんでした。伊藤さんは、東大時代は大内力先生のゼミにおられたということで、大内さんは大内兵衛さんの次男の方ですよ。大内兵衛さんは戦前、大原社会問題研究所の所員でありまして、戦後は法政大学の総長もやられたということで、多少、法政大学や大原社会問題研究所にもかかわりがある、縁のある方です。では、お願いいたします。

伊藤 伊藤でございます。略歴から申し上げますと、1928年山形生まれ、農家の生まれでありまして、旧制山形高校、その前に中学校から陸軍士官学校に行きました。陸軍士官学校では、航空科でありましたが、同期生が大蔵大臣をやった久保亘、高沢寅男。それから小沢一郎という人の側近だった奥田敬和君、皆、もう他界いたしました。

それから1級上が加藤六月、もう1級上が梶山静六。六月も梶さんも航空でありまして、世が世なれば、梶山大尉、加藤中尉、伊藤少尉だったかなと。(笑)。

それから、高校を出まして、経済学部で、ご承知のとおり、大内力先生のゼミの勉強をさせていただきました。善良なる学生でありまして、優良可、不可と点数がつくのですが、だいたい良が、「まあ、こいつは勉強しないけれども、落第はかわいそうだ」というのでつけるという。ゼミぐらいは優がりましたが、他のところはほぼ「全良なる学生」で過ごしたと(笑)。

隅谷三喜男(1916～2003)先生に成田空港の問題などでだいぶお世話になりまして、円卓会議の座長をお務めいただきました。一度、隅谷さんと食事をともにしたことがありまして、「いや、先生、何だか学生時代に勉強した覚えはあまりないですよ」と言ったら、「伊藤君たちは勉強する時代じゃなかったから」などと言っていました。しかし、大学生時代に親友だった堤清二、今は辻井喬、あるいは経団連の副会長になった人もいますし、大きな会社の社長になった人もいます。肩書は東大名誉教授という人もいますし、いろいろおりますが、そういう

本稿は、2013年4月7日(日)に法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて行われた第7回社会党・総評史研究会の記録である。出席者は、雨宮昭一、有村克敏、五十嵐仁、岡田一郎、鈴木玲、佐々木求、園田原三、浜谷惇、兵藤淳史、細川正、栢田大知彦、南雲和夫、木下真志であった。事前に伊藤氏宛に送付した質問に答えていただいた部分(本号)と質疑応答(次号)に分けた。読者の便宜を考え、中見出しを付した。(木下真志)

のは省略させていただきます。

54年に社会党の書記局に入りました。実は卒業してすぐ、力先生のご紹介で農業問題に行きたかったものですから、今で言うと全中に勤めましたが、1ヶ月半ぐらいで肋膜炎になり療養生活になりました。卒業して2年ぐらいしてから、「力先生、どうしましょうか」と言ったら、「農業問題なら社会党の政審か、農民部か、合う仕事がある。どうだろうか」と。

それで和田博雄とか佐田忠隆、岡田宗司、稲村順三とか、「誰か、おまえのいい人に紹介する。紹介状を書くから」と言うんです。和田博雄といたら、ずいぶんえらい人みたいなもので、稲村順三さんに紹介状を書いてもらいました（笑）。それで稲村さんの紹介で、ちょうど農民部に人が欲しいからということで入って、当時、江田三郎さんが農民部長、その後、鈴木委員長の時代ですね。そういうことでございました。

それから国民運動、政審などの仕事をして、安保のことがあり、86年から政審会長としてのさまざまな仕事、それから93年に8ヶ月だけ国務大臣の仕事、その後は幹事長などの仕事をさせていただいたことになります。

いくつかささやかな本は書いていますが、『政界再編が完結する日』（実業之日本社、1994年）というのは、4野党の政審会長、仲良しクラブでやっている当時などが中心です。それから、細川内閣ができた辺りですね。これは落書きみたいなものだと思います。

辞めた後、『動乱連立』（中央公論新社、2001年）を、やや自分なりにまとめてみました。細川内閣、村山内閣についてもやや辛口。私は甘辛だんごぐらいだなと思っていたのですが、村山さんから、「上手にまとめてくれてありがとう」という手紙をもらいました。

その後は、辞めたしばらく後、お世話になった方々にお礼状のつもりで、ささやかな本で『私たちの生きた日本—その「小さな歯車」の記録』（明石書店、2004年）。

書記局23年、議員23年

社会党本部書記局、最初は左派社会党の書記局に入りまして、虎ノ門近くにあったのですが、それから統一をして、今の国会図書館のところにあった昔の建物に移りました。それから、今度取り壊される三宅坂のビルに移って、また、これもおしまいというようなことです。

書記局に23年余り、国会に出させていただきましたして23年余り。まあまあだいたい50年近い、半世紀に近い人生を社会党および社民党で送ったというわけです。半世紀にわたる経過ですから、いろいろな思い出、それからいろいろな政治の節目など、また党の節目もありました。限られた時間ですから、いくつかだけ話をさせていただきますと思います。

第1は私の見習い期間、駆け出しのときの話であります。54年に社会党本部書記局に勤務をするということになりまして、最初の50年代の5、6年は見習い期間、見習い時代です。

伊藤 茂氏 略歴

1928年 山形県生まれ
 1952年 山形高校を経て、東京大学経済学部卒
 1954年 日本社会党本部書記局に入る
 その後、農民部、国民運動局等
 1969年 日本社会党国民運動局長
 1976年 衆議院選挙に立候補（以後8回当選）
 1986年 土井執行部で政策審議会長

1991年 田辺執行部において副委員長
 1993年 細川内閣運輸大臣
 1995年 日本社会党税調会長
 与党大蔵省改革PT座長
 1996年 社民党幹事長
 1998年 社民党副党首
 2000年 政界引退

ただ、思い出がいろいろありまして、印象としては三つぐらいあります。

一つはやはり非常に前途が明るい感じがしたという。その当時は非常に可能性を持っている時代でして、一党支配が起きるのは55年体制からであります。それまでは統一直前、中でも吉田自由党112、鳩山民主党185、左右社会党合計156というようなことがありまして、可能性を持っているということだったと思います。

また現実に可能性だけでなく、担い手もいました。戦後第1回の総選挙では比較第一党になって、若干の期間、片山内閣。それから、人材もおりました。一例でいいますと、和田博雄さん、安本長官。当時の安本長官というのはその後の大蔵省。言うならば官僚の中の大官僚、大蔵省を上回るくらいの権限と執行力を持っていた時代でありまして、和田博雄さんが担当の長官でした。

それから、その人たちを囲むさまざまな政治・経済・社会問題の著名な方々が協力者としていらっしゃいました。いわば、そういう可能性を現実に持っていた一つの時代でもあったと思います。そういうことがあって、何かやはり将来に向けての明るさと発展という気持ちを強く持っていたという時代です。

それに加えて、左派がどんどん伸びる。例えば51年分裂の当時には、衆議院でいえば左派が16、右派が29でしたが、55年、統一直前の選挙では左派が89、右派社会党は67、合計156ということでした。何か社会党が選挙で減るなんて夢にも思ったことがないです（笑）。情熱に燃えて運動したという時代だった。そういう中で分裂と統一というものが、いろいろとそのドラマがあった。

もう一つ特徴として、今、振り返って思うのは、社会党、特に左派の一つの独自の構造と申しましょうか、特異な構造と申しましょうか、

そういう面があったと思います。私の国民運動の先輩で、大柴滋夫（1917～1998）さんという人がいます。

大柴滋夫さんが長く党本部の先輩でもあり、国民運動でも兄貴分でやっていたわけですが、この人が常に言うのは「我が社会党は中央執行委員会と書記局と議員だ」。この三つでもっているんだと言うんです。普通の団体とだいぶ言い方が違うと思います。要するに第1が中執、第2が書記局、第3が議員だ、この三つで我が党はもっているんだ。そのうち一つぐらいおかしくなっても、二つがしっかりしていれば、だいたいもつんだという話をずいぶん述べられました（笑）。本人も書記局の育ちでして、ちょっと特異な構造があったと思います。

なぜだったのかなと振り返るのですが、これは戦後、日本の左翼勢力が形成される過程の問題でもあったと思います。要するに地域に活動家を育てる。それを広めていく。それをオルグする。力をつくる。これは専門のオルガナイザーである書記局員の仕事が多いわけです。たぶん事務と違う。

その方々は、議員のほうが自分より偉いんだという感覚が全然ないわけで、そういう意味では自分がその議員団やいろいろなものを動かしていくんだ。派閥を動かし、党を動かすんだというような意識を持っておられた一つの構造の時代だったと思います。一つの時代と申しましょようか、時代的というのか、あるいは社会党左派的というのか、左派社会党的というのか、そういう面があったんだなと思います。

ただ、政党ですから、リーダーがあり、事務員がいると。ビジネスとして、事務を執行するというわけにはまいりません。この間、テレビを見ていましたら、『Obamians』という本が今、アメリカで出ているそうです。オバマの側近たち、『Obamians』というのが出ている。世界ど

こでもそうですが、立派なリーダーがいるところにはそれを支えるさまざまな参謀役と申しませうか、あるいはスタッフと申しませうか、そういう方々がいる。オバマを囲む人たちという意味で『Obamians』という本が今、出ているそうです。

もちろんこれは政府、政党で言うならば、幹事長とか官房長官とか、そういう肩書は一切抜きです。スピーチライターもいます。年中、知恵を集めてくる人もいます。さまざまなジャンル、経済界、その他、いろいろなところとパイプをつなぐという人もいます。

それは政治団体としては当然の姿だろうと思いますし、有能なリーダーとそういうObamiansみたいなものがうまく機能するような、しかも近代的な形で形成されるような形があり得るのかなということを少し考えさせられたわけです。

二つ目にはその後、60年安保の問題です。社会党本部に勤務してから5年目、6年目ですから、ようやく一人前かどうかは別にして、仕事をしようとしたところに入ったときに60年安保にぶつかりました。これについては、経過その他のことはいろいろな本がたくさんありますから、改めて私から経過的なことを申し上げるつもりは全然ございません。

警職法闘争といいますが、「デートもできない警職法」などと言ってマスコミには評判が悪かったのですが、廃案になりました。岸・鈴木会談で廃案になったという経過を踏まえて、59年3月に安保国民会議が結成されました。今はもちろんありませんが、東京駅の隣に国労会館というビルがあって、そのホールでやった風景を思い起こします。

60年安保について

それらの経過は別にしまして、二、三思うこ

とがありますので、それを申し上げたいと思います。一つは「日本列島燃ゆ」と言われた60年安保闘争の間に四つの段階、四つのステージがありました。

第1は59年3月に安保国民会議をつくって、安保反対で全国に共闘組織をつくる。これは総評から県評、地区労に至るまで軸になっておりますし、各県はもちろん各地区二千何百ぐらいか何か、非常に速いテンポでできたこと記憶しています。そして毎月一度、全国統一行動を展開して宣伝、集会、デモなどをやる。

第1回は中央では日比谷野外音楽堂で、日比谷といえば4,000名。明治公園といえば1万人、代々木公園といえば3万人というのがだいたいデモ屋および警察の諸君の常識であります。それをデモ屋のほうはやや多く発表する、警察のほうはやや少なく発表するというようなことが通例でした。

第1回は日比谷野音でしたが、何かこれは大ごとになるぞというのか、何か盛り上がるぞ、また盛り上げなければならんぞというような雰囲気はずいぶんあったように、今でも記憶しています。これがファーストステージです。組織化の段階、宣伝運動の段階でした。

59年の末から60年の正月にかけて、元気づげる青年たち、反代々木全学連、ブント全学連などありまして、非常に過激な行動が出る。ところが国民的な底辺、世論、それは「安保って何？」という部分がまだまだ多い。非常に不安定な構造になりまして、言うならば、安保国民会議の関係者も水口宏三（1914～1973）さんという人が事務局長で、総評の岩垂寿喜男（1919～2001）さんという人と、社会党は私が事務局次長を務めていて、安保三人男。えらく騒ぎが起こったときには警視庁のほうは「安保三悪人」と言ったそうですが（笑）、非常に悩んだ時期、不安定な時期。安保が重いという

ことを肌身に感じて痛感させられる時期がありました。

私のプライベートの話をはさんで恐縮ですが、実は私の結婚と重なってしまっていて、私は60年5月17日に結婚しました。5月19日が強行採決で、国会を深夜まで5万、10万のデモ隊が包囲するという異常な状態。その2日前です。安保の国民会議の中心にいる人間が、そんなときに結婚式なんて冗談じゃないだろうというのが当たり前ですが、実は事情があったわけです。

3月末に安保国民会議、水口事務局長とか総評とか、いろいろな主だった方々に相談したわけです。「5月の連休明けか5月の中旬かどこかに結婚式をやりたいので予約をしたいと思っているんですが、仕事上、どうでしょうか」と。その相談を受けた方々は、もう全部天国に行かれましたが、「大丈夫だ。5月の連休が終わったら、もう騒ぎは終わっている」。ある人は「連休が終わったら、安保も流れ解散で終わっているよ」なんて気楽なことを言いました。

そうしたら、5月以降、あのような状態になりました。私も立場上、仕事上、恥ずかしいですから、どうしようかと相談して、皆で頭を悩ませて、それで水口事務局長が社会党、総評などの方々と相談をして、「伊藤君のことは大事だし、デモ、反安保はもちろん大事だし」というわけです。それで、最後に決着をつけて宣言をされたのは、「おまえの結婚式の2時間だけ時間を空ける。両院議員総会とか安保国民会議代表者会議とかあるが、2時間だけ空ける。そして、出席をして、おまえを祝ってやる」。しかし「新婚旅行は禁止」(笑)。「休みはなし」ということになりまして、2時間だけの結婚式をやらせていただきました。

神田の学士会館でしたが、東京の宣伝カーが来て、「安保反対、平和を守ろう。伊藤君、お

めでとう」などと言っていた状況でした(笑)。

それから、第3ステージで、3月、4月ぐらいの段階になりますが、何とかこれを乗り越えなければならぬということで、中心にはやはり底辺を広げる。元気すぎる学生も「ちょっと迷惑だぞ」と言って、厳しく説教するというようなことをやりだしました。

そして、全国すべての市町村を結ぶ国民大行進というのをやろうと。ポスターをつくって、そのポスターの真ん中に足跡がベタッとついているのをつくりまして、全国全市町村をつなぐ国民大行進、そして東京に東から西からやってくるというのをやろう。それをずっと実行しまして、その間にまいたビラは推計で数億枚に上るだろうと思います。一生懸命に国民や底辺に支持を広げる。ですから、田舎のほうでも「安保か、湯たんぽか」なんていう誤解はなくなったということになるわけです(笑)。

そして、5.19以降、状況は大きく変わりました、ご存じのとおりの状態。それから6.15の樺さんが死亡した日の問題。この日は朝から梅雨時の肌寒い日で、本当に嫌な日でしたが、朝、大柴さん、井岡大治さんと一緒に南通用門から国会のほうを回って見たら、ホースがいっぱい延びていて、夕方からのデモがあってぶつかると。もうあのときは機動隊がまさにデモ隊に「飛びかかる」という、そんな雰囲気でした。

圧死か扼死か、問題はありますが、それから、安保国民会議で若い娘を殺してまで安保を強行するのはけしからんと言って、断固、声明を発表しようという、共産党は「あれは極左の人々のやったことだから関与せず」と、立ち上がった喧嘩をしておりました。

それからずっと時間が過ぎて、深夜遅く、水口さんと2人で樺美智子(1937~1960)さんのお通夜に行ったことを思い出します。寂しい

お通夜でした。それから翌日、翌々日、虐殺抗議というプラカードの写真が出るような、また大きな行動になっていったというわけです。

6月、結局、衆議院の強行採決、参議院では審議なし、6月20日自然成立、6月23日にひそかに批准書を交換したということになるわけですが、二、三、これと関連して、今でも非常に思うことがあります。

一つは運動のタテとヨコという問題です。実は安保で悩む第1ステージ、第2ステージ、第3ステージ、組合の指令による組織動員がほとんどでありました。そのときには動員というのでやらなければ集会はできないですから、東京地評の皆さん方などずいぶん仲良くして、中心になったのは国労、教組、私鉄、電通か。前の二つは左ぎっちょで、右のほうは右側という、三つの組合がだいたい中心で結構、動員は大きかったのですが、タテの動員、タテ型動員。

そのときには国民会議でいろいろな関係者が集まったときによく雑談で、ヨーロッパでは市民が自ら立ち上がるという市民運動スタイルの運動がいろいろあるが、日本ではそういうのはあるのだろうかという。「あるのだろうか、ないのだろうか」というようなことを議論する。実はそういう状態、そういう構造の時代でありました。

それで日高六郎さんが指摘したように、5月19日の前後を転機にして、まさにタテではなくヨコの運動に、タテからヨコに変わったわけです。あれは戦後、民主主義の最高揚期でしたし、非常に貴重な経験をしたと思っております。ただ、タテとヨコ、あのときの経験、タテの積み上げと努力がなければ、ああいう形での大きなヨコもなかっただろうという気が私はします。

今、タテはありません。当分、労働運動など、あるいは政党など、そんな可能性は全然ないと

私は思います。しかし、これからの運動、やはり国民は主権者であり、世論ですから、これが社会を動かすという意味でのことはデモクラシーの基本として大事なことですが、何かそういうものがどうできるだろうかというようなことを考えさせられているというわけです。

それから後、四つのステージ、段階が終わった後、まさに文字どおり、潮が引くように沈静化をするわけです。要するに6月下旬以降、本当に6月下旬、あのときまでは国会の裏のイチョウ並木の小枝にまで、安保反対と平和の声がしみわたっているという感じがしましたが、きれいさっぱり何もなくなった。そういう中でいろいろな問題が起きる時代になりました。

少し時間を取って恐縮ですが、それで特に思ったこと、60年安保およびその後ということで問題として感じていることを、三つ申し上げたいと思います。

一つは分裂の季節。安保国民会議をつくるときに共産党を入れるか入れないかで、いろいろな議論がありました。これは社会党右派の曾根益さんという人が担当。国民運動委員会というのがなくて、まだ企画局でやっていましたが、曾根さんが局長でした。たまたま浅沼さんが中国へ行くこと。「アメリカ帝国主義は日中共同の敵」という有名なセリフを言った訪中ですね。曾根さんもついていまして、岩垂さんと一緒に羽田まで送りに行きました。当時は成田ではなく、羽田ですから。

そして、「局長、曾根さん、あなたがいないうちに安保国民会議を結成することになると思っています。共産党の扱いがあります。その意味合いはよくよくご存じでしょう」。新産別が抜けるとか、それから社会党の内部対立、内部分裂にもつながりかねない問題でありました。

「しかし、局長、曾根さんがいらっしやらないうちに決めなければならないという日程にな

ると存じますので、私ども二人に任せていただけますか」と言ったら、「任せた」と言って出かけになりました。

そして、あるときには太田薫さんなどは共産党も正式メンバーに入れたらいいじゃないかという意見だったように記憶しておりますが、結局、オブザーバーにしたわけで、群馬県だけは正式だった。そのオブザーバーにするのでも相当反発がありまして、新産別は脱退する、抜けると。警職法のときに入ったが、安保は抜けるということになったわけです。

曾根さんがお帰りになって羽田に迎えに行きまして、「共産党はオブザーバーとして入れるという結論にさせていただきましたが、ご了解ください」と言ったら、「そうか。わかった」と言って、それ以上、彼は何も言いませんでした。何もそれ以上、党内で、あるいは個人で問題にするということは、一切、あの方は言い出しませんでした。

分裂の季節の思い出

それから、安保が終わって、分裂の季節に入りまして、男泣きに泣かれたことが3回あります。一つだけ言いますと沖縄の問題がある。今も少し話題になっています。4.28、4月28日は日本の主権回復の日と同時に沖縄祖国との分断固定化の日であります。

4月28日には全国統一行動をする。核も基地もない沖縄を返せということでした。そして、東京でも大集会を起こす。しかし、安保共闘みたいなものは分裂をしているということで「一日共闘」という形で、相談をしてやるということですが、どうしても反戦青年委員会の扱いをめぐって話がかんない。28日、その2日前まで延々と議論が続くのだけれども、結論は出ない。

沖縄から数百名の代表団が参りました。その

ときに沖縄から代表団団長といわれた人は当時、県評の議長でしたが、桃原用行さんという全電通沖縄の委員長。沖縄の最北端の辺戸岬、はるか本土を臨む与論島が見えるところに、沖縄闘争復帰県碑、大きな立派な碑が立っています。その下、台座に立派な詩が刻んであります。「吹き寄せる風も聞け、押し寄せる波の音も聞け、沖縄県民百万の願いを」とか、あれは桃原用行さんが書いた文章です。

体は大きいけれども、だいたいポーンとしているあの男に何であんな立派な文章ができたのかといたら、本人はバイクに乗って辺戸岬に一人で何日も通って、辺戸岬でじっと一人で考え込んだそうです。そして、考え考えて何か文章をつくられた。あれは本当に桃原のつくった文章に間違いのないと言われました。

桃原用行さんが団長で来られました。それで全国実行委員会、中央実行委員会、前者は社会党系、後者は共産党系、一日共闘をするかしなにか、こういう会議をやったとき、桃原さんが団長でやってきました。体がでっかい、がっしりした男であります。それが、「おれたちは百万県民の願いを背負って、今、ここに来た。おまえたちはけんかしている。おれはどうすればいいんだ」と言って、その大きな男が文字どおり、涙をぼろぼろこぼして、おんおん泣くわけです。

みんな、さすがにしんとしまして、この気持ちを受け止めなければならないということになりました。岩井章（1922～1997）さんが調整役に回りまして、反戦青年委員会の参加は認めない。ただし、労働組合の青年部や政党の青年部などが参加するのは当然であるとか、何かわかったような、わからないような文章をつくらせてやったのですが、分裂の季節を象徴するようなそういう男泣きに誰かが泣くような場面もありました。

二つ目は構造改革論争の問題です。水口宏三さんは非常に悩んでいました。安保国民会議の事務局長、潮のように運動は消えていく。そういう中でいったいこれからどうすべきなのか。あの人は結局、新書版で運動論的な解明ということを書いた本1冊しか残していないのですが、非常に深刻に悩んで飛鳥田さんや成田さんとか、4人集まって4賢人ではないけれども、勉強会をやる。「伊藤、岩垂、おまえも参加しろ」などと言って議論したことを覚えていますが。

党内抗争の時代

しかし、社会党は激しい党内対立と党内紛争になりました。私はその是非について、あるいは留保について論評する資格はないと自分で今も思っています。というのは、断固反対も断固賛成も言ったことはないのです。だいたいさっきの沖縄ではありませんが、沖縄返還、それからベトナム反戦、何がどうか、そういうようなことで真面目にずっと70年代、60年代いっぱい通してということでしたから。

ただ、あの問題は社会党全体の発展にとって非常に不幸な論争だったと思います。例えばドイツのバート・ゴータスベルク綱領のような、あのときにも確かドイツの左派青年部の方々の勢力は相当大きかったはずですが、W.ブランド（1913～1992）がどのように説得をして、どう求めたのか。意地悪く言えば、東ドイツという反面教師がありましたから。

それから、少し時代は違いますが、フランスにおけるミッテランのエピネ大会のような、一つの新しい構想力、新しい時代、それに対する新しい情熱を持つ。そういう契機をつくるべき時代だったのに、それができなくて、結局、非常に激しい派閥対立になり、そして長期低迷とか長期低落という時代に流れていく。

私は当時、まだ社会主義協会の一員でした。社会主義協会から遠ざかるのは70年代半ばぐらいのことで、社会主義協会でも向坂さんと高橋正雄（1901～1995）さんと有沢さんと大内さんでだいぶ違います。三池に対する対応一つ見ても、有沢広巳（1896～1988）さんの対応と三池に通って断固闘えという向坂さんと全然違いますからね。それがあったわけですが、しかし、60年安保の後、何か大きな政権を担い得る可能性を持った時代をどう開くのか、そういう可能性のある時代はあったと思います。

革新自治体について

それとは別の意味で、自分がかかわったものとして、革新自治体の問題があります。60年代半ばでは社会党はまだ世論調査、選挙その他でもボロ負けをするということのない力をもっていたのですが、それから後は長期低落という局面に入るわけです。逆に当時、革新市長会は全国に大きく広がり発展をしました。この違いはいったいどこにあるのだろうかということ是非常に考えます。

自分の体験、かかわり合いとして申し上げようと思いますが、例えば特徴的には一つ、美濃部亮吉（1904～1984）さんの最初の東京都知事選挙がありました。67年4月の選挙でした。当時、東京都知事選挙に勝とうと、何しろ首都東京ですから、象徴的ですからということで、社会党、共産党が連合するわけです。社会党東京都本部と共産党東京都委員会が協議をして、文書で合意をするわけです。

その社共協定の文書を見ると、社会党、共産党およびその他の団体とか、それから社会党、共産党の合意、これが基本であるとか、事務局長は社会党が出し、次長は共産党が出しうんぬん。ひどいのは協定文書の第1事務所はそういうふうにつくって、第2事務所は共産党が運営

をする、第3事務所は社会党がやるとか、まさに政党、社共の論理です。社共は平等であり、社共の協議が決定権を持つ。これがオーソリティーだというような意味合いの社共協定を結ぶわけです。

大内兵衛（1888～1980）先生が実の息子よりも亮ちゃんをかわいがったという説もありましたが、大内兵衛先生がそれを破棄するわけです。ある日、鎌倉から電話がきまして、「伊藤君、私の書いたものを使いの方に持たせてやりますから、30部刷ってください。それを私の指名する者に1部ずつ渡して、意見を聞いて、まとめて鎌倉に知らせてください。それを聞いた上でのあなたの意見も付け加えてどうぞ」という連絡がありました。

その文章、200字詰め原稿用紙4枚に何か別のペーパーがくっついている手紙がまいりまして、大内先生の「12カ条の憲法」というあだ名をつけたのですが、第1条は「明るい会」は社共のものではない。これが第1条であります。激烈なんですね。

内容的にも社共が運営するというのを完全に否定する。革新市政を望む全国すべての人に開かれた組織でなければならぬ。その中から各界から若干名の運営委員か何かを出して、その互選により代表委員と会長を選ぶ。要するに社共が協定したというよりも、要するに宮本論理、共産党の論理ですね。それを真っ向から否定するわけです。

「明るい会」のことなど

実はそういう状況の中で選挙母体となる「明るい革新都政をつくる会」の結成総会が九段会館、今はなくなったのか。元九段会館で、満員の人が集まって開かれます。代表が皆、集まって満杯で集まっているところを延々と待たせて、その舞台裏で重要な協議があった。

大内兵衛先生が現れまして、宮本、成田とか、主な団体の面々が20人ほど、皆、集まっているわけです。「私が出した意見について、皆さん方の意見はほぼ伊藤君から聞きました。宮本君、私の意見に反対ですか」「反対です」「ああ、そうですか。じゃあ、私、美濃部を連れて帰ります」。立ち上がって、美濃部を連れていく（笑）。そこで成田さんも共産党のほうも、袖によりすがって、「先生、出ていかないでください。頼みます」などと言うわけです。

そこで、場所を変え、大内先生と宮本顕治（1908～2007）と成田さん、大内、成田、宮本の三者会談を近くでやるわけです。私は同席しておりません。そう長い時間ではありませんが、そこで見事に宮本理論は粉碎されるわけです。

そして、「明るい会」は社共のものではない。共同声明やいろいろな文書を出す場合でも、前は声明文の後ろに社会党、共産党、総評、何とかかんとか、その後、個人という並べ方をしていました。しかし、その会談の後は団体を並べ、大内兵衛から始まって、各界の代表の方々、中野さんとか、いろいろいらっしゃいましたが、一番最後に社会党、共産党と、変わったわけです。

私はそのときのことを振り返って、そのときの大内兵衛先生の文章、選挙が終わって、選挙に勝った後、そういう経過があることを非常に重要なポイントだったのだけれども、私の考え方では、まだ社会党も共産党も基本は階級論なんです。プロレタリア独裁と言うか、言わないかは別にして（笑）、その論理である時代の人の心はつかめないと。国民意識、国民の意識形態はどんどん変わっている。経済の成長期でもありましたし、変わっている。

そういう中で真に市民の気持ちをつかむということでは、階級原理が悪いという意味ではな

いけれども、階級論の原理の社会党、共産党ではつかめないんだというのが大内兵衛先生の当時の考え方だったろうと思います。

ただ、当選した後、その辺の論争の経過は、共産党にすれば真実その経過を全部発表すれば、宮本のメンツ丸つぶれ、今までの彼らの指導理論が全部つぶれてしまうわけです。それから、美濃部さんの当選した美濃部知事の都政運用にもいろいろと支障が起きたらまずいだろうということで、大内兵衛さんからのお手紙は全部、非公開扱いにしたのです。それがこの手紙であります。我が家の宝物の一つ（笑）。

「プリントを30部つくってください。伊藤様」うんぬんと書いてあり、「明るい会」は社共のものではない。第1条ですね。そういうことになっているわけですが、そういうことがございまして、あのときの一つの論理構造として大事なことだったのではないかと思います。それから、今の時代における主権者、国民、民主主義を、文字どおり、それが主人公となれるような時代をどうつくっていくのかという論理を編み出す上でも、一つの参考になるのではないだろうかという気もいたします。

飛鳥田さんについて

もう一つは、これは船橋さんから話があったと思いますから、ほぼ省略しますが、飛鳥田さんの問題です。私はだいたい責任がある立場でございまして、飛鳥田さんを横浜市長にというときには、飛鳥田さんご夫婦とも絶対反対でありました。奥さんも「何でうちの一雄さんが市長にならなくちゃいけないんですか」ということで、要するに日本社会党のリーダーの立派な役割を果たすというのが人生の目標だったんでしょね。

それで所属する平和同志会は、飛鳥田さんをそういう自分たちのグループのホープとして推

し出していこうということで、飛鳥田国民運動委員長、穂積七郎、松本七郎、お二人を国民運動担当中央執行委員。そういう体制をつくって飛鳥田をサポートし、その方向で彼を大きな存在にしようと思ったのだと思います。

ところが、時代は60年安保が終わった後、完全に分裂と対立の季節に突入しました。さっきの桃原用行の男泣きに泣くではないけれども、いろいろなドラマがあって社共の対立の時代に入るわけです。ですから、飛鳥田さんを含めて平和同志会の皆さんが担ったのとは、全く時代構造が変わるときに非常に不幸な出発をした。

それで私どもは書記局の仲間では平和同志会の派閥の場所へ行って、黒田会長に「飛鳥田さんはいろいろあるけれども、皆、いい人だと思って、飛鳥田さんを中央執行委員に残ってもらいたいんで」と陳情に参りました。そうしたら、これはお話があったと思いますが、黒田さんの答えは「飛鳥田君は今や私たちの仲間ではありません」「もう同志ではありません」というお答えでした。

九段会館で党大会が終わって、中央執行委員を辞めた飛鳥田さんと一緒に横浜に帰りました。そのときに飛鳥田さんが車中で、「伊藤君、あなたと一緒にやった、いかなる核実験にも反対。あの路線はぼくは一生正しいと思って主張し続けるからね」と言いました。私も何かジンとした思いがして、ああ、この人は心のきれいな立派な人なんだなと思いました。

ちょうどその辺りから、飛鳥田さんは色紙を頼まれると、「人生しょせん一人ぼっち」。「委員長、だいたい選挙でたくさん票をいただく仕事なのに、一人ぼっちではまずいじゃないですか」と言ったら、「ああ、そうかね」と言いながら、ニコニコして「人生しょせん一人ぼっち」という色紙をよく書かれました。恐らく相当の

孤独を味わったのだらうと思います。一人だけで考えたということだと思います。

古い平和同志会の左派のほうの仲間と相談するわけでもない。そして、彼が考えたのはやはり参加型民主主義、参加型市民主義という時代をつくるというのが、恐らく結論だったと思います。そういう結論に立ち至って、市長選挙が始まるその日には、あたかも「私は横浜市長に立派になるために生まれてきた」と言わんばかり（笑）、信念が変わったわけですね。そういう雰囲気、それを軸にして革新市長会がつくられました。

ある人の本に誰かが、社会党自身は長期低迷、その中で革新市長会は一時期、最も多かったとき、北海道から沖縄まで、主要な場所は東京、一番人口が多い、大阪も京都も含めて、そういう都市の知事が皆、革新のサイドにいるわけですから、日本の総人口の過半数が革新自治体の市民であったと。そう書かれた人もいます。私も自分で計算したことはありませんから、鳴海さんなど革新自治体に詳しい人に聞いてみたのですが、「いや、伊藤君、おれも計算したことがないよ。ただ、過半数と、伊藤君が断定しているのかどうか。これはよくわからないから、少なくとも3分の1を大きく超えるぐらいのことは絶対大丈夫だろう」と言ってくれました。

要するにある人は、日本の総人口の過半数を占めたという。その論理を考えてみると、さっきの美濃部さんの話も重なるのですが、やはり市民論理、いわゆる一般的なポピュリズムといわれる市民論理という意味ではなくて、参加型であり、知性のある、行動力のある、そういう意味での国民、主権者としての市民ですね。地方分権ではない市民主権論ですね。

結局、社会党の中の構造論争の結果として起きた理論委員会における結論で、プロレタリア独裁という言葉は使っていないけれども、その

ニュアンスはずっと残っているという内容でした。そういう本来、変化していく時代の中で革新政権が取るべき論理構造というものの食い違いが表現されているのではないだろうかという気もいたします。

それが安保前後の話であります。

80年代のこと

消費税論争と4野党連合政権協議についてお話しします。

89年の春、社会党、公明党、民主党、社民連、4野党の党首が京都で集まって、連合政権協議を始める。ちょうどその前後は伯仲時代です。私が選挙に当選した76年もそうでしたが、伯仲時代の幕開け、与野党議席伯仲時代。社会党が伸びるわけではないのだけれども、野党多党化、公明党ができるというようなことがありまして、伯仲という時代といわれたわけです。あるいはリクルートの事件もありました。

いろいろなことがあって、4野党連合政権協議。党首レベルで89年4月に合意し、3月、4月、5月、6月と集中的に4野党政審会長が中心になって、連合政権の協議をするわけです。いろいろな議論をし、また、いろいろな文書も発表しました。しかし、その後、その協議が続く中で7月の参議院選挙に入り、参議院選挙で与党、自民党が過半数を割りました。

それで政審会長で私と公明党は坂口さん、神崎さんが出たときもありました。民主党は米沢さん、中野寛成さんが出たときもあった。社民連は菅直人。しょっちゅう会合をやったり、それからどこか旅行して、合宿をしたりしていました。しょっちゅう飯を食って、飯を食うと、「おい、長男、伊藤君、早く座って。末っ子、菅君、早く料理頼んでこい」とか、そういうようなことだったわけですが、やりました（笑）。

それで選挙が終わった翌日から消費税問題に

ついでに協議を開始しました。そして、夏が終わるころに消費税廃止関連9法案を提出したわけですね。なぜこういう勉強会をして、こういう法案をつくったのかということの趣旨は、よくあのときには「ダメなものダメ」という言葉がありましたが、それがダメだと（笑）。我々は間接税のない社会なんて、財政、税制であり得ないので、どのような対案をつくるか、どのような提案をするのかということがなければ、本来のデモクラシー国家の中における野党として、存在の意味がない。そういうことで、我々は間接税のあり方についてはこう考えるという意味合いをベースにした9法案を提出したわけですね。

夏の間、4野党の、特に政審の書記局の皆さんが中心になって、延々と夏休みなしで努力して、夏が終わるころに記者発表をして国会に提案しました。記者発表しましたら、新聞記者の方が「あなた方は夏休みなしにやられたようですが、感想はいかがですか」と言いますから、私は俳句のことは全然わからないけれども、あえて言うならば、「汗でなく、税にまみれて、夏終わる」と言った。「俳句になっているかどうかは別として、気持ちわかります」と笑われたことがあります。

今だから、もう言ってもいいのだろうと思いますが、そのときに最後に提出するまでに、私が一番苦労したのは、実は強い反対勢力がありました。IMFJC、電機、自動車などですね。この組合の委員長さん方が「断固反対だ。こんな法案を出さないでくれ」ということで、表向きにするとマスコミに聞かれたら大変ですから、表向きには絶対しない。そういうことで実はだいぶ強く申し入れられまして、何回も会合をしました。

言うならば、自動車にしろ、あるいは電気製品にしろ、今まで10%近くもの物品税がかか

った。それが3%になる。会社としては大もうけであります。本来、性格的に会社の労働組合ですから、それで断固やめてくれ、どうしてもやめてくれというのをIMFJCの幹部の皆さんと都内某ホテルで、何回も繰り返し相談をしました。

結局、最後に当時の電機労連の委員長が、「いろいろだいたい議論をやったけれども、伊藤君とは長い付き合いだから、まあ、顔の立つ形で何とかまとめよう」と言って仲裁に出てくれました。それで提案のゴーサインが出たというような経過もありました。

それで参議院では陸軍士官学校同期の桜である久保巨君が大奮闘して、廃止法案可決、11月末でしたか、可決したその日の晩、参議院の本会議場に傍聴に行き、その場から真っすぐ本部に行き、宣伝カーを引っ張り出して有楽町に行き、「ただいま法案が通りました」と演説をしたことを思い出します。

そういうことになりましたが、参議院では可決、そして衆議院では廃止法案は審議未了廃案ということで否決になって、両院協議会を開催して、少し手直しをした格好で実施されるという経過になり、今日に至っているということになるわけですね。

消費税が終わった後、一転して野党共闘冬景色になりました。これはいろいろ出したのですが、結局、選挙で社会党一人勝ち、公明党、民主党は皆、社会党に票も取られてしまったというような構造結果が出る。湾岸戦争が始まって、湾岸戦争に対する態度が民主党、公明党、社会党と違うということになって、89年春以降積み上げてきた野党共闘が一転して崩れるわけです。

「津軽海峡冬景色」をもじった「野党共闘冬景色」という歌がいろいろと政治家の宴会で歌われました。「消費税が終わったその日から、

野党共闘は雪の中、市民が野党のけんかを見つめていて、ああ野党冬景色」という歌を、仲よし政審会長4人も含めて、あちこちで歌う状況でありました。作者不詳ということですが、実は作者は私でございます（笑）。

そういう一幕がありまして、この89年のときの状況をいったいどう考えたらいいのだろうかというのが一つの問題意識として残されている。

細川内閣から自社さ政権へ

次は93年のことです。これも経過は皆さん、知られていることです。宮澤さんが解散をする。それから、単独過半数にならない。裏のイニシアティブは小沢一郎さんが動く。土井さんを議長にする。社会党の中はいろいろな議論がありました。シャドウキャビネット、田辺さんと私などでつくったのがベースになって入閣をすることになって、細川内閣になったということです。

ただ、問題は小選挙区比例代表連立制という、この形になった経過のところの政治的な手配をなぜできなかったのだろうかということも今でも時々思います。田中秀征さんが確か案を出して、武村さんが成案をつくって、内閣の看板スローガンとして持ち出したという経過だったように思います。なぜあの肝心なことが、社会党は社会党なりに一つの対応ができなかったのかということをおもうのですが、社会党惨敗で政権交代という厳しい現実、これが一番大きな問題だったと思います。衆議院の議席は130から70になりました。社会党としてはかつてない惨敗であります。

社会党の教科書は社会党が勢力を増やす。そして、野党の友人、場合によっては良識ある自民党の一部の人も含めて、政権を取るというのが社会党の長年の教科書であります、教科書

とは逆の現実が発生しました。非常に難しい事態だと思えます。

ある人があのか、社会党は進むも崖、退くも崖」という表現をしました。崖というのはオーバーな言葉ですから、険しい道と言いましょか、ああいう形で政権交代の国民の世論は非常に大きく盛り上がっていた。しかし、内部、その中におけるかつての主導権はない。惨敗の中での逆転、政権交代という現実ですから、党内でもずいぶん意見がありました。

選挙に負けたのだから、とりあえずまず今の執行部、山花執行部、辞めろという意見もありました。それから小選挙区比例制にしたら、消えてなくなるよという意見を言う人もいました。そうかといって、政権交代を求める多くの国民の意向に対して背を向けるわけにはいかないという人もいました。閣外協力にしたらどうかという意見もありましたし、ガヤガヤずいぶんいろいろな意見がありました。

ごく簡単にもう二つだけ申し上げます。94年のことあります。細川さんが辞意を表明されました。羽田孜さんという外務大臣兼副総理から、私の大臣室に電話がありまして、「伊藤ちゃん、何か騒ぎが起こっているようだが、どうなっているの？」と言いますから、「あなた、何、言っているの。総理が辞意を表明して、もう夕方、臨時閣議だよ。あんた、何、してるの？」と言ったら、外務大臣なもので外国から賓客があつて、皇居で天皇とお食事をしている。テレビを見ていたり、携帯で電話かけたりする機会がないんだという話でありました（笑）。

「その辺のことは礼儀を失しないようにしながら、早々に切り上げて、早く帰ってこないといかん。場合によっては、次はあんたかもよ」と言ったら、「とんでもない」なんていうようなことを彼は言っていました、そんなこともありました。

そのように細川さんがお辞めになって、羽田さんのごく短い時間を経て、村山内閣になるわけです。村山さんが総理大臣になった日、私も「村山富市」と書きまして、うちへ帰りましたら、ワイフは入院していておりますので一人なんですけど、深夜まで電話が鳴りっぱなしでした。

二つありました。一つは「水と油の自民党と手を組むとは何事だ」という電話、もう一つが社会党から総理大臣を出しておめでとうという（笑）。両面ありました。どっちが多かったかなと思ったら、「おめでとう」のほうが少し多かったかもしれませんが、両方ありまして深夜まで鳴りっぱなしでした。これは多くの支持者の皆さんも含めた国民の皆さんがお考えになった気持ちだろうと思います。

首班指名になるまでもずいぶん曲折がございました。党内代議士会をやりますと二分する。片や、反自民を叫び、片や、反「イチイチ」（小沢一郎・市川雄一）を叫ぶというわけです。私は振り返ってみて、細川内閣、羽田内閣、その時代のあれがいろいろあったらと思うんですが、村山内閣ができる経過を見ますと、反イチイチ、および反自民党というような工作をして、議員総会は大もめにもめている。ただ、そういう中で、あのときの力学としては、やはり自民党の政権復帰への執念は非常に大きかったんだと私は思います。

政権政策をめぐる、「イチイチ」、あるいは「イチイチライス」（小沢・市川・米沢隆）という人もいましたが、私たちと非常に激しい対立をしました。あのとき小沢さんはやはり社会党、特に社会党左派を切ったほうがいいという気持ちがあったのだらうと思います。その是非は別にして、「イチイチ」との対抗関係は非常に強くありました。

そういう中で自民党のほうは、その対立をし

ていることを含めた、社会党、さきがけの政策提案をほぼ、「それで結構です」と全部のんでしまうということがありました。やはり自民党の政権復帰への執念は非常に強かった。これがあの時代の変化をもたらした力学だろうなという感じがいたします。

村山さんは真面目な方ですから、いろいろな努力をされました。戦後50年に当たっての首相談話、それから被爆者援護法や水俣問題など、戦後、懸案として残っていた問題について、それぞれ一定の区切りとけじめをつけようという努力をなさったということは事実のとおりであると思います。

しかし、一番大きかったのは、自民党の政権復帰への執念。橋本総理大臣になってから、橋本さんからずいぶん聞かされたことがあります。「戦後50年の談話、あれと国会決議、比べて見てみる。自民党と社会党が議運の場お互いに正式にテーブルについて議論した。あの中身、何ていうことないだろ、あんなもの。という程度の決議しか、国会でできなかったじゃないか」。言われてみれば、そのとおりであります。

村山談話のほうは一步進んでいる。進んだ村山さんの意向を表現している。「あのときに、ぼくは自民党の中にいて、とにかく与野党協議はそれはそれとして、村山という人を立てなくちゃならん」。ある意味では自分たちが政権党に復帰しているために、村山さんを立てなければならぬということで、ずいぶん苦勞したという話を橋本さんからいろいろと伺ったことがあります。

結局、そういう力学だったと思います。村山さんがお辞めになった後、1年ちょっと後か、村山元首相に感謝するパーティーを、えらく大きくはなかったけれども、やりました。森喜朗さん、それから河野洋平さん等々、自民党の幹

部がお見えになりまして、そのお二方がご挨拶の中で、とにかく「恩人」というんです。「村山さん、恩人」と連発するわけです（笑）。

しかし、やはり村山さんのあのお人柄ですね。誰が見てもいいおじいちゃん、土井さんは怖いおばちゃんというのが子どものイメージですから（笑）、それで評価されているところもあるんだろうなという気がします。

もう一言だけ付け加えて終わります。96年のことであります。1月3日に伊勢神宮に参拝をされて、今年も一生懸命、総理としてがんばりますという記者会見をして、4日の夜中に官房長官、野坂さんに、それから橋本さんに訪米を中止してくださいという連絡をして、5日の日に辞めると発表するわけです。

そのときはそのときとして、5日の朝、ニュースがすぐ来ますから、車の中から野坂さん、官房長官室に電話して、「あなたがついていたのに何でこんなことになるんだ」と言いましたら、「いや、昨日の夜、言われて、『せめてあと3ヶ月ぐらいやってくれなくちゃ困る。何とかしてくれ』ということをやを涙をこぼして言ったのだけれども、もう断固として、総理は態度を変えなかった」。そういうことを官房長官、野坂さんと電話で会話したことを覚えています。

しばらくしてから、村山さんと一緒にコーヒーを飲んで、「あなたは天照の神様に大うそついたのでないか。神様にお参りに行って、今年もがんばりますと記者会見をして、翌日くると変わった」。そうしたら、村山さんはニコニコして、「いや、もう前の年の暮れに決めていて、腹は決まっています、正月はもうさすがしく青空を見てしたから」と。「その前の年、何ですか」と言ったら、「伊藤君、だいたいのおまへも知っているだろう」と言って、それ以上詳しく言わなかったわけです。

実は彼なりに、あの村山さんの時代の社会党、

これからの政治について思うところがいろいろあったのだらうと思います。当然のことでしょう。

それで年末、伊豆長岡の温泉ホテルに泊まって、そこにさきがけの武村さんと呼んで話したそうです。そして、武村さんと協議をして、やはり社民党とさきがけで社民リベラルの新党をつくろう。そのためにはもう辞める。退陣すると。

私はそこまでは知っていたのだけれども、武村さんの証言がどこかでありまして、12月29日だということがほぼ確実、明らかになりました。12月29日、伊豆長岡温泉ホテルではなくて、三養荘という和風旅館でそういう話をして退陣決意を固め、あるいは社民、さきがけの合同という確認もして、さすがしく正月を迎え、神様にはちょっと悪かったけれども（笑）、5日に退陣を表明したというわけです。

これも知られているように、その前の年の1月、阪神大震災が起きたとき、山花さんたち27~28人が離党して新党をつくるという申し入れを持っていった。久保さんが幹事長で、それを受理しようかどうかという複雑な心境が久保さんにはそのとき、あったようですが、そういうことがあった後ですから、皆、だいたいまとまっていない。要するに今までの分を全部パーにして新党をつくるんだという人と、それからグループで集まろうという人の論理は全く対立して、それでもう白々しくなっているというのが当時の状況でした。これは名前を変えただけという結果に終わったということでもあります。

最後に一つだけ申し上げたいのは、一番大きいのは9月27日の問題であります。9月27日、国会解散、衆議院の解散になりました。その後の代議士会でサトカン（佐藤観樹）さん、幹事長が幹事長の辞表と離党届をポイと出しまし

た。そして、それに賛同する方々が約半々でした。半分ぐらい退場される。

そのころには私は理論センターにいましたが、96年にはイタリアでオリーブの木、ブローディ政権がスタートしました。私も資料、パンフレットをつくって、オリーブ研究会というのを私の主催で1～2回やらせたことがありました。

97年にはドイツで赤と緑の連合政権、シュレーダー政権がスタートしました。同じく97年にはブレア政権、労働党政権。これは圧勝した形で成立をする。その他のいろいろな国もあ

りました。

ウラルのかなたのほうでは地中海の周り、全部、社民党、社民の赤いバラが咲くという時代になったわけです。ちょうど同じ時期に日本は崩壊した。なぜだろうかということのをいろいろ考えさせられます。

いろいろな方々のお話を皆さん伺っているようなので、ダブらないようにと思い、また、自分の体験した範囲のことだけに絞りまして、まとまらない話をさせていただきました。

(次号へ続く)

《法政大学大原社会問題研究所叢書》

法政大学大原社会問題研究所／菅 富美枝 編著

成年後見制度の

新たなグランド・デザイン

人びとが保護の対象から自身の権利を行使する主体となるための支援とは何か。ケア、介護、消費、福祉など、さまざまな現場と世界の最新状況から、成年後見制度を再構築する。 5985円

法政大学大原社会問題研究所／原 伸子 編著

福祉国家と家族

一九八〇年代以降に福祉国家が縮減する過程とグローバル化の下で家族政策が主流となっていく文脈を、米・英・独・スウェーデン・日本などの歴史的な事例を通して比較検証する。 4725円

船橋晴俊、壽福眞美 編著

公共圏と熟議民主主義

《現代社会研究叢書9》
現代社会の問題解決

今日の原発・エネルギー問題、移民の受け入れ、環境破壊、基地問題など、現代社会の諸問題を公共の場での熟議を通して解決するために、日本と諸外国の具体的事例をもとに検討。 4935円

ニクラス・ルーマン 著

《叢書・ウニベルシタス961・962》

社会構造とゼマンテイク 1・2

社会学の可能性を開く新たな社会システム理論はあるのか。法や教育、社会理論など多様なテーマに関して行なった思想史的研究。 ①巻 徳安彰訳：5040円／②巻 馬場靖雄・他訳：5460円

ウオルフガング・ソフスキー 著

《叢書・ウニベルシタス988》

安全の原理

自由と安全のどちらを選ぶのか。自然災害、金融、経済不安、原発事故、紛争、テロなど、現代社会に顕著に現われる安全をめぐる諸問題について考察。 佐藤公紀、S・マスロー 訳：2940円

法政大学出版局

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-3
TEL 03-5214-5540/FAX 03-5214-5542

http://www.h-up.com/
※表示価格は税込みです